

通信小海

婚も葬も

牧師 水草修治

先日、十年ぶりに土浦めぐみ教会を訪れた。私が学生時代にすこした懐かしい教会である。桜川のほとり千坪ほどの敷地に建つ大礼拝堂。その庭にピスガと名づけられた小礼拝堂が数年前に竣工していた。ピスガとは旧約聖書に出てくる峰の名で、ここからモーセは約束の地を臨みながら天に召された。スペイン製の自然石で葺かれたチャペルの深緑色の屋根が、山の稜線を思わせる姿をして天に伸びている。これは、キリスト者の天国への希望を表わしている。

この小礼拝堂ピスガは、結婚式場と納骨堂の機能を兼ね備えている。現世がすべてで、死はすなわち絶望、終わりである人

【今月のひとしづめ】

「生きることはキリスト。死ぬこともまた益。」ピリピ書一：二十一

にとつては、婚と葬が同じ場所で営まれることは不可解だろう。不浄な葬は陰気な寺で、めでたい婚は鳥居立つ社でというのが、従来通りの相場だろう。

しかし、キリストを信じるなら、あなたにとつて死は永遠の生命への門となる。門をくぐれば、光り輝くのちの国。だから、教会ではめでたい婚とおごそかな葬がともに営まれる。生が神の恵みなら、死もまた神の恵み。ゆえに、生死いずれも益である。

あなたも、絶望に至る人生から方向転換して、この希望ある人生とともに歩みませんか。教会へどうぞ。

「私にとつては、生きることはキリスト。死ぬこともまた益です。…私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまっています。」

ピリピ書一：二十一、二十三

日本同盟基督教団 松原湖高原教会 牧師水草修治

牧師館 長野県南佐久郡小海町大字豊里一十六 一

〒三八四一一三 二六七九二四七七六

郵便振替 五三 六一六八三

黄色い十字架 パロの五十メートル北
ヤナシヨウの向かい

集会あんない

日曜日

朝礼拝 午前十時から十一時

夕礼拝 午後八時から九時

水曜日

聖書を読む会 午前十時半

祈り会 午後七時半

*初めてのの方も歓迎します。

*個人的相談にも乗ります。

忘れたころに

「天災は忘れたころにやって来る」というのは、たしか漱石の弟子で物理学者の寺田寅彦のことばだったろうか。九月一日は防災の日で、いろんな特集が組まれていたが、寅彦のことばが本当ならば、防災意識が高いころには天災は訪れないで、だれも災害などこないと思いだすころに天災がやってくるということである。だから、結局備えのしようがないと、寅彦は言っているのではなからう。むしろ防災意識があつてもなくても備えをせよと言いたいのだろう。

半年前いっぱいだったわが家の非常袋は、いつのまにか空っぽである。なにか入れておかなければと家内と話す。

主イエスは、世界の審判の到来について次のように話された。「それはちょうど、ノアの日のようだからです。大洪水の前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、

人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らにはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。……だから、あなたがたも用心していなさい。人の子は思いがけない時に来るのですから。」

人の子が来るというのは最後の審判のときがくるということである。それは個人にとつてみれば、死の到来の日に置き換えることもできよう。天災と同じく、だれにとつても自分の死は予定よりも早く来るものらしい。うかつに死を迎えてしまうわけだ。そして目覚めたら神の法廷。生まれてこの方してきた事柄を、ことばや行動はもちろんのこと、心の中の醜い思いまでもすべてあばかれることになる。

罪あるままでは天国には入れない。あなたの備えはできているだろうか。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」

使徒十六章三十一節

よい忠実なジャガイモ

四月からにわかに忙しくなつて、毎週のように月曜日は東京に出かけなければならなくなつてしまった。月曜日は畑をいじる日である。結果、百三十坪の畑は申し訳ないほど草ぼうぼう。もう雑草を栽培しているのか、作物を栽培しているのか見分けがつかない。

けれども、ジャガイモはあの日当たりの悪い中で実をつけてくれた。インゲン豆も実をつけてくれた。最近、家内が子どもたちと草取りをしたら、遅ればせながらトウモロコシも枝豆も腹いっぱい収穫できた。ニンジンもこれから収穫できそうである。

ありがたいなあ。なんと忠実な作物たちだろう。私もこの世を去つて主のもとに帰つた日、「よい忠実なしもべだ。主人の喜びをもに喜んでくれ。」と肩を抱いてもらえるような生き方をしたいと思つた。

ゆづきちゃん倶楽部

本物有機野菜高原のパン屋さん駐車場にて

御手のぬくもり

さて、ひとりのライ病人が イエスのみもとにお願ひに来て、ひざまずいて言った。「お心一つで、私はきよくしていただけます。」イエスは深くあわれみ、手を伸ばして、彼にさわって言われた。「わたしの心だ。きよくなれ。」すると、すぐに、そのライ病が消えて、その人はきよくなった。

そこでイエスは、彼をきびしく戒めて、すぐに立ち去らせた。「気をつけて、だれにも何も言わないようにしなさい。ただ行って、自分を祭司に見せなさい。そして、人々へのあかしのために、モーセが命じた物をもって、あなたのきよめの供え物をしなさい。」ところが、彼は出て行って、この出来事をふれ回り、言い広め始めた。そのためイエスは表立って町の中にはいることができず、町はずれのさびしい所におられた。しかし、人々はあらゆる所からイエスのもとにやって来た。

マルコ福音書一章

当時、ユダヤ社会ではライ病は特に恐れられ忌み嫌われた病でした。ひとたびライ病であることが判明すると、家族から引き離され町の城外に隔離されたのです。万が一、道で人に出会ったならば、遠くから「けがれていきます！ けがれていきます！」と叫んで、人が自分に近づくことがないように警告しなければならなかったそうです。しかも、恐ろしいことですが、ライは単なる病気でなく天からの刑罰であるとさえ思われていたので、人々から恐れられるだけでなく、忌み嫌われてさえたのです。

なんとという悲しいことでしょう。この人は自分の体にできた湿疹がライであるということが判明したとき、どんな絶望的な思いにとらわれたことが。あの日以来十数年、彼は友人にも会っていません。それどころか、兄弟とも、そして、自分の妻や子どもに会うことはおろか近づくことさえ許されないので。まして、指を失ってでくのようになっただけの手を握ってくれる人などこの世にただの一人もいなかったのです。孤独でした。

そんな彼がイエス様の噂を耳にしました。イエス様は神が遣わされたお方で、どんな病

もたちどころに癒すことができになるといふのです。たいそう哀れみ深いお方で、どんな者をも顧みてくださると言うのです。「ならば俺もイエス様の所へ行ってみよう」と彼は思いました。しかし、イエス様のまわりは人だかりがしています。ライ病人が近づけるわけがありません。

が、ついにイエス様が町を出て一人になられたのです。チャンスです。男は恐る恐るイエス様に近づきました。少し離れたところでひれ伏しました。「イエス様。あなたが望んでくださったら、私はきよくしていただけるのですが。」

ふと暖かいものを彼は肩に感じたのです。十数年も感じたことのない暖かさでした。人の手の暖かさでした。イエス様の手でした。「わたしは、望む。きよくなりなさい。」イエス様の御手のぬくもりは彼のからだ全体を、そして心までもあたためました。気が付くと彼はきよくなっていたのです。

兄弟

旧約聖書にヤコブとエサウという双子

の兄弟が登場します。双子とはいえ、二卵性双生児であつたらしく、似ても似つかぬ二人。兄エサウは子どもころは外遊びが好きで、長じては筋骨隆々で毛深く、ハンティングの名人となりました。性格は粗暴なところがあるけれど、さっぱりしていません。好きな食べ物は当然、肉。他方、弟ヤコブは、家の中で静かにものを考えたりしているタイプで、豆料理などが趣味。毛深くもありません。性格は一見おとなしいのですが、実のところ執念深く、知恵がまわるほうでした。

どうもこの二人は、ルナールの『きつね物語』の狼ときつねとそっくりです。もちろんエサウは狼型、ヤコブはきつね型。

どちらが好きであるかは人それぞれでしょう。どちらが良くどちらが悪いというわけではありません。ただ、親としては自分の好みでえこひいきしてはまずい。どこ

ろが、この両親はえこひいき合戦をしてしまいました。マッチョのエサウに肩入れしたのは、当然、父親イサク。父は兄息子の獲ってくる鹿の肉が好物だったからです。男はごちそうに弱い。

他方、一見おとなしいヤコブに肩入れしたのは母リベカ。粗暴なエサウとちがつて、「ほら、母さんみたいな花が咲いていたよ。」と野のユリを一輪、持ってきてくれるような弟息子に女親の好みが傾くのは、やむをえないことでした。女は優しさに弱い。

けれども、内心、どんな好みのちがいがあつたとしても、親としてはそれを子どもに見せるべきではありませんでした。この親たちはここで誤りました。そして、この父母のえこひいき合戦が、兄弟の不幸を招くことになります。成人したヤコブは策略をめぐらし、エサウは腕にものを言わせて、相続争いを始めて、ヤコブは策略をめぐらし、ついには殺意さえ抱くような関係に立ち至ってしまうのです。

今回の聖書の教訓は単純なこと。単純だけれど、むずかしいことです。親は、子どもを決してえこひいきしてはならないというこ

とです。えこひいきは、えこひいきされた子も、されなかった子も不幸にしてしまいました。

父たる者、長男がステーキを食わせてくれて、弟が煮豆を持ってきて、けっして兄のみを評価して、弟をないがしろにしてはなりません。そんなことをすれば、いずれ兄弟ともに不幸になるでしょう。母たる者、兄が母の日を忘れて野球に興じているのに、弟がカーネーションをひとかかえプレゼントしてくれても、弟のみを好んで兄を疎んじてはなりません。そんなことをすれば、いずれ兄弟はたがいに憎みあうようになるでしょう。

どの子も、どの子の個性も神さまのかけえのない作品。神にたくされたそれぞれの作品を、それぞれに感謝して受けいれたいものです。

「兄弟は、苦しみを分け合つたために生まれる。」箴言十七十七